

第240回

「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(令7年3月) 句会記録

春の季語に「春霖(しゅんりん)」という季語があります。ホトトギス歳時記には「春のいつまでも降り続く長雨のこと」とあり、また別の歳時記には、春の雨はわりあい長く続くことが多く、「春霖」または菜の花の咲くころなので「菜種梅雨」とも言われるようです。ここ数日、長雨が続きましたが、まさに「春霖」の日々でしょう。

さて「道草」の句会です。2月は「新橋ばる一ん」で教室が確保できず、通信句会までで終了ということになりました。更に小生も白内障手術を実施して、PCを長時間作動させることが困難でしたので、句会記録の作成を止めさせていただきました。悪しからずご了承下さい。そして3月です。3月の句会に参加された方々は次の通りです。

3月の投句に参加された方(16名)

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

句会に参加された方(7名)

創風さん、和感さん、一光さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、芦尾白然。

(欠席された9名の方の選句は、句会では奥田さんが代読披講して下さいました。毎月、いろいろなスケジュールが重なり、句会に出席できない日も発生すると拝察いたしますが、もう少し多くの方が句会に出席され、ご自分の選ばれた句は、ご自身で発表していただければと思います。句会に参加される方が、段々少なくなっていくのではないかと気がかかります)。

本日の優秀句並びに獲得票数

今月、皆さんに優秀句として選句され、天賞に推挙された句、投票の多かった最多得票賞(☆印)の句は、下述の通りです。

◎『ただいまと子は靴底に花の塵』	荻女	天4☆9
◎『薄紙にくるむひとりの雛納め』	多佳	天3☆11
◎『仕事終へ日永の街で伸び一つ』	柴楽	天2☆5
◎『花こぶし光り放ちて暮れなづみ』	晶如	天1㊦3
◎『冴え返る夜の静寂のケルト唄』	蒼樹	天1㊦3
◎『パンねだり窓辺に来たりすずめの子』	歌多音	天1㊦2
◎『摘草に夢中になりて迷子かな』	錦流	天1㊦2
◎『三六五段伊香保神社に春の願』	一光	天1㊦1
◎『蘆の角川辺に陣営組む如し』	白然	天1㊦1
◎『野仏のまだらに纏ふ春の雪』	傘吉	☆5
◎『春泥に足を取られて手をつなぐ』	錦流	☆5

最多天賞句は、天賞4票の荻女さんの句「ただいまと子は靴底に花の塵」でした。獲得した票数も9票(多数得票☆印)を獲得し、2番目の獲得数でした。天賞票推挙のコメントにもありましたが、常日頃、お母さんが子供を思う深い愛情が、読者にはしっかりと伝わったのです。

天賞獲得票数は3票でしたが、最多得票数11票(最多得票賞☆印)を獲得した多佳さ

んの句「薄紙にくるむひとりの雛納め」に集中しました。上五、中七の前半で「薄紙にくるむ」と、このお雛様が永く薄紙にくるまれ収納されて来たことで、読者は大切にされいるお雛様だと知覚し、中七の後半と下五「ひとりの雛納め」で、今はひとりで片付ける「雛納め」であることを知らされます。読者には作者の寂しさと、しかしお雛様を大事にされているご家族の温かさも伝わってきます。

次に柴楽さんの句「仕事終へ日永の街で伸び一つ」が、天賞2票（多数得票☆印）を獲得しました。下五の「伸び一つ」には、作者の日永の解放感というか、春の明るさ大らかさが、句に満ち満ちていることを読者は感じます。

天賞票はいただけなかったですが、傘吉さんの句「野仏のまだらに纏ふ春の雪」と、錦流さんの句「春泥に足を取られて手をつなぐ」は、それぞれ5票を獲得しました（今月の多数得票賞（☆印）は5票までの句としました）。

傘吉さんの句は、中七の「まだらに纏ふ」が、季語「春の雪」を見事に補足し、錦流さんの句は、下五の「手をつなぐ」が、季語「春泥」にほんのりとした艶めかしさを感じさせ、☆印を獲得したのでしょう。

3月の句評はこの辺りで擱筆します。以後は4月の季語を勉強し、季語に相応しいリズムを模索するようにしたいものです。大切なことは、詠んだ句を何度も何度も読み返すことのようにです。芭蕉の言う「舌頭に千転せよ（舌頭千転）」を想起させます。それでは皆さん、また4月11日に、元気にお会いしましょう。

白然記

俳句上達のヒント

藤田湘子著『俳句作法入門』（角川選書）からの抜粋 12頁～

俳句は五・七・五できっちりと

◎ 字余りの原因は、一に推敲不足、二に材料過多である。

- 荒磯の不漁季の糶(せり)は鱈のみ
- 盛んなる菊なり散る日の無き如し
- ゆきずりの骨董店にて時雨けり

いずれも中七が字余り、第一句の「は」、第二句の「の」はまったく不要、第三句は「にて」を「に」にするだけで十分だ。第一、二句のように無用のてにをはを加えて平気であるのは、俳句が五・七・五という認識がうすいからだと思う。一音の無駄が一句のリズムに弛緩をもたらし、そのために佳句となるべきものが駄句になり下がってしまう、ということだってあるのだ。

推薦の作品

- 雪吊の縄金色の薄暮あり 藤井浅夫

は、格調高いリズムによって、暮色に金色を放つ雪吊りの縄の趣をよく表現しているのだが、この中七に余分なてにをはを入れて「縄に金色の」としたらどうか。内容は同じでも拡張の高さはたちまち失われて、だらだらとことばがつながっているだけの凡作になってしまう。切れ味もない。

俳句は韻文である。その順は、五・七・五をきっちり踏まえることによって生じる。五・七・五できっちりと詠うという自覚が乏しいと、こうした字余りをやっても平気ですましてしまう。特に中七においてこの手が多いのだが、これは推敲不足という以前の問題だから、十分に戒めるべきである。

材料過多の例を挙げると

○ 鶯や女子寮チャイムの唄さくら

○ 瞑想の森林吾に寒風寄せ

などがそれ。

第一句は女子寮のチャイムのメロディーが「さくらさくら」であつたということなのだろうが、ここまで抱え込んだら動きがとれなくなってしまう。女子寮にチャイムが流れている程度にとどめて、中七の字余りをきらって無理なく表現することが肝要。第二句は下五の字余りだが、「寒風寄せ」は余りにも強引。それに「森林」を「森」にすれば、ここで二音が浮く。・・・というようにして、もっとことばをラクに使ってやる方がいい句をなすことにつながるのである。

○ 光も風も素通る寒林今日柩車

これもぎゅうぎゅう詰め。まず「素通る」の「素」と「今日」の無駄が目につく。そのへんを考慮して添削すると、

○ 寒林や光と風と柩車行く

ということになるが、私だったら、もう一つ「風」も省略して、寒林、光、柩車行く、とこれだけで一句しようとするだろう。

以上、句材の可否は別にして、字余りをちゃんとした五・七・五にするための要点のみをしるした。

以上